

『アーサー・ラザフォード氏の光満ちる祝福』

著：名倉和希

ill：逆月酒乱

「トキ、電車のチケットを買ってくれないか」

都心へ向かう電車の券売機の前に立ち止まったアーサーに代わり、時広はクレジットカードで切符を購入した。

「はい」

「ありがとう」

いまどき英語表記に切り替えられる機械ばかりだが、アーサーはわりと面倒くさがるのだ。仕事で移動するときは秘書があれこれと手配してくれるし、かつては成田空港からタクシーでホテルまで乗りつけていたので、そもそも券売機に慣れていない。成田空港からタクシーなんて、いったい何万円かかるのだろうか？ 庶民感覚ではちょっと信じられないが、セレブのアーサーにはそれが日常だったのだ。

いまでは時広といっしょにいるときは気を遣って、電車に乗ってくれることが多い。成田空港から都心へ向かうには、電車が一番速いということを知ったせいもあるだろう。

一時間半後、時広とアーサーは無事に新宿駅に到着することができた。ここからは、さすがにタクシーを使う。駅から少し距離があるホテルまで、大型のスーツケースを引きながら歩く根性は、さすがにない。長時間フライトで疲れていたし、なによりアーサーが苛立ちはじめていた。なにも言わないけれど、押し黙った表情ですべてがわかる。

タクシー運転手は中年の男性で、行き先などのやり取りは時広が請け負い、アーサーをそっとしておいた。高身長で仏頂面の外国人客に気後れしていた運転手だが、時広が日本人だと知ると安堵の笑顔になった。

「へえ、ニューヨークにお住まいで、年末年始を日本で過ごすために帰ってきたんですか。それはそれは」

時広とアーサーがいったいどんな関係なのか不思議そうではあったが、尋ねてくることはなかった。十分ほどでホテルに着いた。時広が支払いをしているあいだにアーサーはさっさとタクシーを降り、トランクを開けてスーツケースを出している。ホテルのベルボーイが台車を持ってきてくれて、そこに積みこんだ。

アーサーは時広がタクシーを降りると手を繋いできた。二人揃ってホテルのエントランスホールへ入っていく。フロントのカウンターにいた男女のホテル従業員には、二人とも見覚えがあった。

「いらっしゃいませ。お待ちしております」

「またお世話になります」

にっこりと笑顔を交わして時広が挨拶をしているあいだに、アーサーは素早くチェックインの手続きをしている。かなり気が急いているようだ。

エントランスロビーにもニメートル以上はありそうなクリスマスツリーが飾られていた。ここで年末年始を過ごすのは二年ぶりになる。

このホテルは、二年と五カ月前に、時広とアーサーが出会ったところだ。ラグジュアリーな外観と内装、外国人客向けにすべての空間が広くとられた造りをアーサーは気に入っているようだ。時広とアーサーがここに来たのは一年と七カ月ぶりくらいだが、宿泊した延べ日数は二百五十日以上にもなる。ホテル従業員たちとは、当然のように仲良くなった。

渡米するためにチェックアウトしてからの一年半で従業員の何割かは入れ替わっただろうが、親しくなった者もまだたくさんいることだろう。

「元日の特別料理はまだご予約いただいていませんが、どうなさいますか？ 和風、洋風、中華風など何種類かございます」

「そうですね——」

料理の写真を見せられて検討していたら、アーサーに肩を叩かれた。

「トキ、ひとまず部屋へ行こう」

「あ、うん」

真顔で言われてしまっては頷くしかない。元日の料理についてはまだ申し込みに余裕があるということで、二人で相談してから後日予約すると話してフロントカウンターから離れた。

時広の腰に腕を回し、まるで抱きかかえるようにしてエレベーターへと急ぐアーサーを、従業員たちが温い笑顔で見送ってくれる。長期滞在していた時広とアーサーがゲイのカップルだと、みんな知っているのだ。それでもちょっと恥ずかしかった。

スーツケースを乗せた台車を押すベルボーイとともにエレベーターに乗り、高層階まで上がる。そのあいだ、アーサーはずっと時広を離さなかった。若いベルボーイは階数表示のボタンをじっと見つめて、こちらを見ないように配慮しているようだった。

三人とも無言でエレベーターを降り、ベルボーイのあとについて部屋へ向かう。

「こちらです」

ベルボーイがカードキーでドアを開けた。

部屋は、かつて長期滞在していたクラスのプレジデンシャルスイートだ。まったくおなじ部屋ではないが、内部の造りは似ていた。

「スーツケースはここに置いてくれ。室内の説明はいらない。ありがとう」

アーサーはベルボーイにそれだけ声をかけて、さっさと追い出すようにして退室させてしまった。日本ではチップの必要がないからこそベルボーイがなんだかかわいそうになってしまい、愛

想がなさすぎるとひとこと文句を言おうかと振り向いた時広だが、いきなり抱きしめられた。

「ああ、トキ」

ウールのジャケットにぎゅううと顔を押しつけるハメになり、苦しくてмоがく。

「抱きしめたくてたまらなかった。やっと……」

「アーサー、苦しいい」

「やはりファーストクラスにするべきだった。ビジネスクラスではたいしたことができない」

飛行機の中でなにをするつもりだったのか。

先月、一人で日本に帰ったときは、当然のごとくエコノミーだった。自分の稼ぎではとうていビジネスになんて乗れない。ましてやファーストなんて。

アーサーはセレブだ。会社員ではあるが国際的な大企業のエリートだし、実家が裕福で十代のころからあるていどの資産を分けられ、運用してきたらしい。時広はアーサーにいまどれだけの資産があるのか知らない。知らなくていいと思っているので聞かない。

けれどマンハッタンのミッドタウン・イーストの、一カ月の家賃が七千ドルもするアパートメントに住めるくらいなのだから、相当だろう。しかし、本人に言わせると「世界的にはたいしたランクではない。私ていどの者は山ほどいる」らしい。上には上がいることくらい、時広だって知っている。根っからの庶民である時広にとって、別世界だということだ。

「トキ、あまり愛想よくするな。だれかれかまわず笑顔を振りまかなくていい」

「そんなつもりはないよ」

「君の笑顔は殺人的にキュートなのだから、私にだけ向けなさい」

真剣な顔でアーサーはそんなことを言い、時広をひょいと抱き上げた。「わぁ」と突然のお姫様抱っこにびっくりする時広にかまわず、アーサーはそのままベッドルームへ入ろうとする。

「待って、ちょっと待って、アーサー。部屋についたばかりなのに、いきなり？」

「待てない。私はもう何日も待った」

「ああ、うん、それはまあ、ありがたかったよ」

この二週間の休暇を作るために、時広はかなりタイトなスケジュールをこなさなければならなかった。なにも言わずに我慢してくれたアーサーには感謝しかない。もう何日も、恋人らしい時間をすごせていなかった。くたくたに疲れて帰宅する時広の体調を、アーサーが気遣ってくれたことくらいわかっていた。だから日本についたら、精一杯、アーサーに報いたいと思っていたけれど、まさかホテルに着いた早々にベッドルームに運ばれるとは。

休暇前に仕事が忙しくて禁欲生活を余儀なくされたことは、過去に何度もあった。そのたびに、休暇初日にいきなりセックスを求められたけれど、さすがにそろそろ落ち着いてきたのではないかと甘く見ていたところがある。

アーサーと恋人になったのは一昨年九月で、NYで同棲をはじめてからも一年半以上になる。今年の夏のバカンスはハワイへ行って、一カ月ものあいだ、たっぴりと愛しあった。時広はあれが蜜月のピークで、二人の関係は深まり、大人らしい余裕があるものへと変化していったのではと思っていたのだが――。

「ああ、トキの匂いだ」

時広の首筋に顔を埋めて、アーサーはしみじみと呟く。そこでハッとした。そういえば、十数時間にわたる長距離フライトのあとだ。

「ねえ、シャワーを浴びさせてほしいんだけど」

「あとでいい」

「でも」

「どうせ汚れる。あとで、私が隅々まで洗ってあげよう」

微笑んだアーサーの目が笑っていない。これは一ミリも譲るつもりがないな、と時広は諦めた。脱力した時広を、アーサーはそっとベッドに下ろしてくれる。

「トキ……」

甘い声で名前を呼ばれ、覆い被さってきたアーサーにメガネを取られた。唇に、アーサーの唇が重なってきて、しっとりとしりぞいたあとに軽く噛まれる。それだけで背筋がじんと痺れた。そうすると、もう時広はみずから唇を開いて口腔内にアーサーを誘ってしまう。

「ん、んっ」

舌が触れあってしまえば、止まらなくなる。時広は縋りつくようにアーサーの首に両腕を回した。濃厚に舌を絡めあうと、そのいやらしい感触に性感がどんどん高まっていく。舌先をカリッと噛られたとき、時広の中に眠っていたものが完全に目覚めた。ぐんと体が熱くなっていく。

恋人の肌に触れなくなると、時広はアーサーのセーターの中に手を入れた。しっかりと筋肉がついた滑らかな背中と腹を撫で回す。手のひらで恋人のぬくもりを感じ、たまらない気持ちになっていった。お返しとばかりにアーサーも時広のセーターをめくり上げた。

「あ、ああっ！」

片方の乳首を指先で摘ままれて、時広は背筋をのけ反らせる。頭を沈みこませ、もう片方にアーサーは吸いついてきた。

「ああ、ああっ、アーサー、アーサーっ」

舐め転がすようにされて気持ちいい。恋人になってから数えきれないほど愛撫されてきた乳首は、性感帯のひとつになってひさしい。アーサーと出会うまで無垢だった体は、そこへの愛撫だけで極められるほどに開発されていた。

「ああ、待って、アーサーっ」

執拗に乳首を弄られ、どんどん切なさ募っていく。まだ服を脱いでいないのに、股間がはち切れそうなほど膨れあがっていた。このままでは下着の中で出してしまう。時広も自覚がないままに溜っていたのだろう。こんなに早く高ぶってしまうなんて。

「アーサー、服、脱がせて」

「だめだ。まだ我慢しなさい」

いじわるなことを言うアーサーに戸惑いながら、「脱がせて」「だめだ」の応酬をする。そのあいだにもせっぱ詰まった状態になっていく。

「汚しちゃうから、お願い」

「……可愛くおねだりしてもだめだ」

可愛くしているつもりはないが、アーサーはさらに乳首を痛いほどに強く吸い上げる。あろうことか、同時に股間を手で撫でられた。

「ああっ」

びくびくと腰を震わせて、時広は歯を食いしばる。すこし漏れたかもしれない。自分で脱ごうとしたが、その手をアーサーに拘束された。両手首をまとめて掴まれ、ベッドに押さえつけられる。時広の非力では逃れられそうにない。アーサーはときどきこないじわるをする。

「アーサー、アーサー、おねがい」

重ねて懇願したら、アーサーはニヤリと笑いながらボトムボタンを外してくれた。ファスナーが下ろされて圧迫感が緩和される。けれど脱がしてはくれず、下着の上から時広のそこをぐっと鷲掴みにした。

「ああっ！」

くちゅっとかすかに水音がする。先走りの液とちょっとだけ漏れたもので、すでに濡れているのだろう。ぐいぐいと揉まれて、さらに溢れてしまいそうになった。

「だめ、そんなにしたら、アーサー、出ちゃう、出ちゃうからっ」

「出せばいい」

「いやだ。脱がせてよ、汚れちゃう」

「もう汚れているから出してもおなじだ。出したくないなら、我慢するしかない」

耐えられそうにないからお願いしているのに。

苦しくて辛くて涙が滲んでくる。その目でアーサーを恨めしげに睨んだら、めずらしく舌打ちした。両手を拘束していた手を離し、アーサーは荒々しくくちづけてくる。激しく舌を絡ませながら、時広のボトムを下着ごとずり下ろした。解放されて一瞬だけホッとする。

けれどアーサーは自分も下半身を手早く露わにすると、生身のそれを時広の股間に押しつけてきた。焼けるように熱い塊がゴリッと重なってくる。

「あ……」

痺れるような快感に腰が震える。ぐいぐいとアーサーが擦りつけてきて、時広は強い快感に喘いだ。二人とももうびしょびしょに濡れている。先端からこぼれる体液が混ざりあい、濡れた音をたてた。屹立がぬるりと滑る。ごつごつとぶつかる。

「あ、あ、あ、ああっ……！」

二人ともアンダーヘアが生えかけで、ザリッと擦れた。そんなことにも息が詰まるほど感じる。ここ数日、ヘアを剃っていなかった。

去年の夏から、時広はアンダーヘアを剃るようになった。ストレスから円形脱毛症になってしまい、それをアーサーに見られたくなくて全部剃ってしまったのがはじまりだった。

それ以来、アーサーの手によって毎晩のようにバスルームで剃毛されている。そのうちアーサーのアンダーヘアを時広が剃ることになり、いつしかそれがセックスの前戯になった。

「トキ、ヘアが伸びているな。あとで私が剃ってあげよう」

耳にねっとりと囁かれて、ぞくぞくっと背筋に甘美なものが駆け抜ける。

「ああ、こんなに漏らして。いやらしいな」

「あ、あ、あ……っ！」

頭が真っ白になった。アーサーに押し潰されそうになりながら、時広はいつてしまった。どくん、どくんと間欠的に白濁を迸らせる。体液は重ねた二人の腹のあいだを汚した。

ぎゅっと目を閉じて、開放感と性の快楽に浸る。ひとつ息をついて目を開くと、間近でアーサーが自分を見つめていた。まだいつていないアーサーの茶色い瞳は欲望でギラついていて、いまにも噛みついてきそうな獰猛さが感じられる。

「トキ、気持ちよかったか？」

「……うん……」

いちいち聞かなくてもわかっているくせに、アーサーは時広を恥ずかしがらせるために聞くことがある。いつている瞬間の表情を凝視するのも悪趣味だと思う。けれどそれがアーサーで、愛ゆえだと思うと時広はそれもまた嬉しいと感じてしまうのだ。

体を起こしたアーサーは、上半身の服も脱ぎさった。まだ昼間なので窓のカーテンは開いていて、冬の青空が見えている。差しこむ陽光が、アーサーの美しい裸体を照らした。時広も服を脱ごうとしたら、アーサーに脱がされる。体液で汚れた腹は、アーサーが丁寧に舐めてくれた。ついでのように臍に舌を突っこまれて悶えさせられ、もう一度、乳首も弄られた。

「ああ、もう、胸ばかり……」

真っ赤に腫れている乳首が痛くなってきて抗議したら、体をひっくり返された。ベッドにうつ伏せにされて、尻だけ高くあげる格好にさせられる。アーサーがなにをしようとしているか察して、時広は尻の谷間を手で隠した。

「やめて。恥ずかしいし、汚いよ。やっぱりシャワーを浴びたい」

「トキの体で汚いところなどない。それにきちんと濡らして解さないと、君がケガをする。いまさら恥ずかしがるな」

「恥ずかしいものは恥ずかしいでしょ。潤滑剤はスーツケースの中にあるよね？」

尻を手で覆いながら振り向くと、アーサーが眉間に皺を寄せている。その辛そうな表情は、きっと股間で限界近くにまで勃起しているもののせいだろう。

「アーサー、とりあえず一回、僕が手か口で——」

「その可愛いポーズはわざとか？」

「は？」

いったいなんのことだ。

「尻を手で隠して振り向いている、そのポーズのことだ」

「え？」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<https://www.fwinc.jp/daria/>